

空



2008年

**SORA** 21号

晴夜 (21) | 1

柴田 佐知子

海中の柱状節理寒波来る

冬ざれや空ゆくときの鳥の脚

消火器を据ゑて本山凍りけり

思ひ断つ色に日暮のお茶の花  
遠出せぬ父となりたり冬帽も  
一打もて山の覚めたる鋤始  
成木責はじめ思はぬ声の出て  
真中に籠つてゐたる土竜打つ  
その中に老いたる声も投扇興

隣

高倉和子

山壁に雪のあつまる朝かな

初厨少しの水を使ひけり

繭玉や日矢新しき父祖の山

注連縄の夕べの雪に湿りたる

電線のうなりて山の枯れにけり

大人しき兎を抱きて初詣

雪激し雀いく度も飛び立てり

耳鳴りの続きに夜の虎落笛

山寺の高き石段冬椿

初夢の匂ひ忘れてしまひけり

日向ぼこ母の隣にゐるごとし

均されし土美しき二月かな

繰り言のると続きて春の夢

老人の多き日本や種を蒔く

小学校の椅子の低さもあたたかし

先日、長崎に柴田主宰と出掛けた。高速バスで約二時間の小さな旅である。荒井千佐代さんが引き継がれることになった「沖」の長崎県支部会のパーティに出席する為だったので観光などの予定は無かった。私が吟行が出来なくて残念ですねと言うと、柴田主宰がメモ用紙を取り出し、じゃ今から十句ねと席題を次々に出し始めた。そしてなんとかようやく作り終えたら、次はバスの外の景色で十句と言う。殺風景な冬の枯れきった山ばかりが続く中、悩みながらも黙々と作句した。お互いの俳句を見せ合いながら気がつくつくと、もう長崎に着いていた。

俳句は何時でも何処でも出来るものと改めて思う。

# 空作品評

柴田佐知子

革椅子のくるりと廻りお年玉 中田みなみ

革椅子の主のイメージは読む人によってそれぞれ異なるであろうが、私は風格あるお祖父さまが浮んできた。主になじんだどっしりとした革椅子。それが「くるりと廻り」読む私の前にも「お年玉」のぼち袋がすつとさしだされる。

短いごく普通の言葉が、みなみさんの手に成ると軽やかな映像を生み出すのである。らくらくと作られてるように見えるが、その後ろにはたゆまぬ精進によって磨きぬかれた優れた言語選択の手腕があるのだ。

十字架のイエスが踏絵ふめといふ 荒井千佐代

踏絵江戸時代、キリシタン摘発のため幕府が行った宗門改めの手段で、版に刻んだマリアやキリストを踏ませた。旧一月四日から九日に長崎奉行で行い、その後信徒の多い地でも行われるようになったという。一八五八年の日米通商条約締結により廃止された歴史的な季題である。

作者は多くの人に踏まれてきた踏絵のイエス・キリストが、私を踏みなさいといわれたというのである。いいのですよ、踏んで……。踏めなかつた信者は処罰され、多くの殉教者も出た「踏絵」に深く真向かう作者だから聞こえる声なのである。

一步でて夫を忘れし雪をんな あさなが捷

「一步でて」の切り出しがユニークである。続く「夫を忘れし」にドキリとする。そして下五が「雪をんな」とは：参りました。女は、ことに妻は雪女より恐ろしいかもしれませぬよ、世の旦那様方。

雪降ればつもれつもれと囃すなり 小林 朱夏

「つもれつもれ」と、囃し言葉をそのまま取り込んだ童心溢れる作品。雪を憎むと言った一茶のような豪雪地帯の住人からみると、何を暢気なと言われ

そうだが……。近年ますます雪が積ることが無くなってきた福岡に住む私には雪がちらついてきた時の、どこかときめくような気分はよく分かる。暢気ではあるうが、ストレートな明るさが魅力である。

冬の日のホワイトシチューことことこと 苑 実耶

こちらも穏やかな日常が描かれている。とろみの出たホワイトシチュー。「ことことこと」によつて、そこに流れるやさしい時間が描かれる。静かな「冬の日」がさりげなく効いている。

夫看取る話の弾む女正月 高倉恵美子

元日の「男正月」ともいう大正月に対して、満月となる一月十五日の小正月を「女正月」といい、松の内を忙しく過ごした女性が晴着を着て年始廻りなどする。この句は、一息ついた女性が集まって大いに盛り上がっているようだ。勿論みな夫よりも長生きすることは間違いないと思っている。「夫看取る話の弾む」が可笑しい。

遺跡より全き器つちぐもり 青山 悠

博物館などの展示物を見ると大方は土器のかけらや、欠けた器である。ところが、この発掘現場ではどこも欠けたところが無い器が発掘されたという。この句の要は「全き」である。この言葉を得たことで、句柄がぐいと大きくなった。それを受ける「つちぐもり」が、古代へ誘うような効果をあげ、更にスケールを大きくしている。

鉄塔をつき刺し冬の山となる 吉村 摂護

「鉄塔」と「山」を組み合わせた句は多い。つまり類想が生まれやすいということであるが、掲句は、鉄塔をつき刺すことで、ただの山が「冬の山」になったというのである。面白い表現である。視座をすこしずらすことで、類想の隙間を縫って詠むことができるのである。類想を恐れては身動きがとれなくなる。恐れずにのびのびとチャレンジしていただきたい。(以下略)

# 空集

柴田佐知子選

ゆるやかに草をすべりて穴惑

福岡

吉村摂護

百艘のボートが浮ぶ木歩の忌

ぐつぐつと畳の下の濁り酒

日本の村が消えゆき小鳥来る

朝月夜猪鬣の鏝落す

玄海島天皇が来て冬が来て

臘月や葉袋を抱いてゆく

鉄塔をつき刺し冬の山となる

春満月黒鯛ちぬの白子も太るころ

声出すとこぼれさうなり花柊

愛媛

佐々木千代

すぐ暗く日暮ととのふ花八手  
けふひと日の応へとおもふ冬の虹  
山ひとつ越えふるさとの寒さかな  
夜嘶の影が大きくなつてくる  
病状は嘘書き送る隙間風  
無愛想な山にかかりし冬の虹  
鋸引きをされたる鯿の大頭  
寒鯛にしづめの水を打ちにけり  
小春日や駄菓子屋の名はまからん屋  
衢神灯し夜咄続きをり  
霜の花人汚れずに生きられぬ  
雲割れて水鳥青き海抱きぬ  
搗き餅の廊下にあふれぬしことも

長崎

中条さゆり

